

---

# 海に宿る月

天帆出

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海に宿る月

### 【Nコード】

N9984C

### 【作者名】

天帆出

### 【あらすじ】

海沿いの町で少年と少女のひと夏不思議系恋愛ファンタジー

沈んでいく。

あかるい陽射しを反射して緩やかに揺れる水面を目指し小さな腕を伸ばすが、遥か届かず、逆にどんどん遠ざかってゆく。

ママ

薄青く明るかった海面はまるで少女を見捨てたかのように冷たく光り、暗い深い底が手招きをはじめる。

上に　上に　戻ろうとばたつかせる手足にまとわりつく重い水底の塩水は体温を奪い生にもがき死に抗う少女から体温を奪い諦めを誘う。自分を包む冷たい海水の中で、暖かい一滴が目頭に揺れた。それを合図にするように、喉の奥に我慢して留めていた最後の空気がゴボ……と不快な音を響かせながら小さな丸い泡となって一斉にはじけ出た。

ママ

最後の意識が暗く揺れはじめる。

死んじゃうの？　わたし、死んじゃ……

海沿いの小さな村ではその規模にふさわしくないほど騒ぎが大きくなっていた。

「町のダイビングクラブに友達がおるけん頼んでみる」

「人手は多い方がええ。急いで頼む」

漁船をつける筏で老婆が正座をし手を合わせ、言葉に成り切れない呪いをもごもごと口の中となえる。

沖に流されて「たすけてえ」と叫んでいた少女にいち早く気が付いた幼馴染達が、筏で漁の為の網縫いをしていた大人に知らせ泳ぎ自慢の青年が沖に泳ぎ出たが、もう小さなその姿は水面から姿を消してしまつた後だつた。

瀬戸内海と太平洋を結ぶ海沿いの、小さな湾を抱えた蜜柑の香り立つ村落。年寄りと僅かな若夫婦、そして更に数少ない子供たち。そんな静かな漁村を何十年かぶりに賑わせた事件だつた。

遠くなる……薄青かつた陽光……既に少女に意識はない。

その小さな背中をふわりと細く軟らかい一本が抱きとめた。

一本は二本になり、二本は三本になり、さわさわと、やがて数え切れない数十本となり少女の背中を抱きかかえる。

同じ茶色、同じ感触のふさふさとした触手達は一つの大きな蓋を作るようにして少女の上に覆いかぶさつてきた。小さな肉体の上でそれらはわさわさと動き、触手の内側に隠れていた細かな気泡をかきあつめ大きな一つの球にしてゆく。

まるで、風呂場で洗面器をうつ伏せにして空気の塊を中に作りそこに顔を突っ込み素潜りごっこを楽しむ子供のように、触手を持つたそれは空気の球を大事そうに抱えながら少女の上に覆いかぶさつてきた。

即席でできた空気の球の中。一本の触手が、それまでうごめいていた触手達とは違う動きをみせる。それは少女の胸元をぽんぽんと叩くと次に口元へゆき小さな膨らみを中で動かしながら少女の口の中へ“ふうー”と何かを吹き込んだ。

その行為を三度ほど繰り返した頃、少女がようやく飲み込んでし

まった海水を吐き出し、胸をぜいぜいと鳴らせながら大きく息を吸い、薄く目を開けた。

「りり…ちゃん…？」

目の前でわさわさと蠢く茶色い触手達を見つめながら呟く。

「りりちゃ…ん…？」

もうろつと手を伸ばしながら……二度呟いた。が、冷えた体力の限界は再び彼女を眠りの底に誘う。

りりちゃん

それは去年、冬の始まり。まだ幼稚園に通っていた頃。

幼稚園では様々な生き物が飼われていた。池ではザリガニに鮎に田螺に亀。教室ではメダカにカブトムシや鈴虫の卵に幼虫。

佐和子は園庭の隅に建てられた小屋に住むウサギの担当だった。

小屋には産まれて二年目の若いウサギと、彼女が入園した時には既に老いを迎え始めた茶色いウサギが一匹。年寄りのウサギはそのせいか動きも穏やかで、長年園で飼われていたおかげで子供にも慣れていて、若く機敏な二匹より遙かに子供達から愛されていた。

もちろん、ウサギ当番となった佐和子にとっても、彼女は特別なウサギとなった。

冷たい水底。息を吹き返して目の前に浮かぶ茶色い塊を見ながらも驚くことも恐れることもなく、むしろ懐かしそうな微笑すら浮かべて

「りりちゃん？」

弱々しく腕を伸ばしながら懐かしい茶色いウサギの名を呼んだ。目の前に浮かぶ茶色い触手の塊は小さな気泡を佐和子に向かって

吐き出しながら、少女の問いかけに答えるよう、緩やかに巨体を反応させた。

りりちゃん……

りりちゃんなのね……

甘酸っぱい空気の塊の中ですっかり安心したように、再び、穏やかに瞼を閉じた。

佐和子が発見されたのは、彼女の家が在る小さな湾をさらに越えた隣の村の湾だった。建設中だった堤防のテトラポットの隅で穏やかに横たわる少女を、探索に加わっていた青年団の一人が見つけた。

小さな漁村で起こった、小学生になったばかりの少女が溺れ一時とはいえ行方不明になりながらも助かったという小さな事故は、他の海水浴場での死亡を含む大きな水難事故に隠れ公になることのないまま幕を閉じた。

そして、幾度目かの夏。

白いブラウスを汗で滲ませ黒いひだスカートをひるがしながら寂れた海岸沿いを自転車で駆け抜ける少女が、居た。

小さいく開けた湾に出ると古い木造家屋が立ち並ぶ一筋の道路が現れる。家々の前を流れる国道、その向かい側には堤防を越えて海。

逆に、家屋の後ろにはきれいに手入れされた蜜柑の山がもっこりとそびえ立つ。

シャーツと音を立てながら走らせていた自転車を一つの棧橋の前で停め、彼女はその向こう海に浮かぶ筏に向かって叫んだ。

「ヨシばあちゃん」

「おお、佐和ちゃんかあ、今もんだんかあ？」

小さな筏の上で漁に使う網の綻びを縫っていた老婆がその手を休めて振り向き答えた。

「汗かいたろう、麦茶でも飲んでいかんかねえ」

脇に置かれた大きなヤカンを指差しながら叫ぶが、自転車の少女は首を横に振る。

「いんやあ、晩御飯の準備もあるしい」

老婆も深くは誘わない。

「そつかあ、じゃあ、うちの畑にニガウリのできとるけん、よかつたら& amp; #25445;いできい」

少女は大きく手を振り「ありがとう」と叫ぶとペダルに足を戻し、再び自転車を漕ぎ出した。その後ろ姿を見ながら老婆は溜息をつきながら一人呟く。

「やつぱりまだ海は怖いもんかねえ。もうあれから八年は過ぎたんにねえ」

佐和子が帰っても、家には誰も居ない。老夫婦は三年ほど前既に他界し、父親はそのすぐ後に交通事故で他界した。その後の生活のためにパートに出た母親は夏の陽の高い季節でさえ明るいうちには帰らない。

仕事に疲れて帰る母親のため学校から帰宅して僅かな時間の間に家の中をきれいにし、晩御飯の支度などするのが、今の彼女の役目だった。

古い平屋の家に母娘二人。大きな硝子張りの玄関を開ければ、慎ましいその暮らしには不釣り合いな広い土間がひんやりとした空気を用意して暑い外から戻る佐和子を待っていた。

自転車を手間に入れようとふと下を見ると玄関脇に大きく長細いスイカがごろりと転がっている。

「誰やろう……澤田のじっちゃんかなあ……宏んとこのばあちゃんかなあ……」

たいていの家では漁と山を兼業しながら畑も作り自給自足に近い暮らしをしている。その中で細長いスイカを作っていて気安くおすそ分けなどしてくれる人の顔を何人か思い浮かべながら台所に運ぶ自転車の後ろに積んでいた学校の鞆を居間に放り投げると、先ほどのヨシ婆の畑から貰ってきたにがうりを眺め「まあ誰でも、解った時にお礼できるよう日持ちのする煮物でも作っとけばええか」にっこり笑った。

「なあ、佐和子……」

陽が落ちて暗くなった頃仕事から帰った母親が娘の手料理に普段通りに箸をつけながら幾度となく繰り返し返された話をまた口にする。



「やっぱりこん家売って町に引っ越さんかね？ あんたも学校近くなるし、もう受験なんやから塾に通いやすい所でアパートでも借りんかね？」

佐和子は、テレビのリモコンを力チ力チと遊びながら

「まあたそん話？ そりゃあ……お母さんには通勤にも不便で悪いけど……私、こん村を出る気には……なれんのよ……」

どうしても……最後の一言を口の中でもごもごと申し訳なさそうにこもらせながら母親から目をそらし、見るわけでもないテレビの画面を見つめる。

「けれど、あんたもあんなことがあってから海が怖かるう……こんな暑い盛りになっても昔みたいに他の子に混じって泳ぐこともできなくて、辛かるう？」

テレビではお笑いの番組が流れているにもかかわらず、部屋の中を冷めた空気が漂う。母親が佐和子の様子を見つめながら一口、一口、休み休みに箸を口に運ぶ。

「なあ、そのニガウリの煮物、うまくできたと思わん？」

突然に、佐和子が笑いながら話しを変える。

「今日ヨシばあちゃんにもろうたんよ。まだまだいっぱい畑にできよったけん、この夏もようけ食べさせてもらえるなあ」

母親が眉間に皺を寄せながら箸を置いた。

「私の通勤やらなんかどうでもええんよ。なあ？ 佐和ちゃんもつと自分の事考え？ あんたはもう受験なんやし、塾だつて行きたかる。何より……」

何よりも、こんな広い家の中で自分が仕事から帰るまで、娘が一人で居なければならない、母親にはそれが心痛んだ。大人の自分でさえ夜中にふと目覚めれば心細さと寂しさで体が震える。なまじ、かつてこの家が賑やかだった頃を知っているだけに。

「あん頃は家の中で絶えず誰かの声がしとったねえ。正月には土間で餅ついて、盆には庭で麻殻焚いて……けんど今ではうちら二人きりやない、広すぎる家は……何や寂しいわ」

母親のこのセリフも、既に何度目か。

そして佐和子の返事も、同じく何度目か。

「ごめん、お母さん……それでもまだ、私ここにおりたいんよ……海は確かに怖いし広いこの家はほんとに寂しいけど……」

ふう、と小さく溜息をつき、母は再び箸を持ち直す。

もう、これ以上は何を言っても無駄なのだ。

この村にどんな想い入れがあつてか、恐れる海も寂しい古い家も及ばないほどの愛着があるのか、一度たりともこの手の話に娘は良い顔をしてはくれない。

しょうがないわ、まあ、またいずれかの折に

母親の胸の中で家売り引越す話はまた持ち越しとなる。

その胸中を知ってか知らずか、佐和子の心の中で違う想いが膨らみ増える。

りりちゃん

幼稚園最後の年の冬、佐和子が世話をした茶色いウサギはとても静かに寿命を迎えた。

珍しく雪が積もった。十何年ぶりの積雪だとか、ニュースにもなった雪の日の朝。

雪のせいで随分遅れたバスに乗り、幼稚園に着いて教室へ行くより先に一番最初に向かった小屋の中。他の若いウサギが佐和子に気付いて餌をねだりに走り寄る姿を余所目に、茶色いウサギはひっそりとまだ眠っていた。

「りりちゃん？」

寒いのかな？ 心配になって戸を開け中に入る。パサパサの毛並みが年齢を伺わせる。

「りりちゃん、寒いん？」

眠っているものであつたら藁でもかけてやろう、そう思いながら抱き上げたウサギは、冷たかった。降っている雪よりも。頬を刺す風よりも。

どっしりと重い体。閉じられた瞳に薄くこびりつく赤茶けた目やに。

ぐにやつと柔らかい腹に反して硬い腕と足。

「りりちゃん？」

喉の奥から流れ込むざらざらとした空気が胸をはたと震わせながら鼓動を早める。

「せんせえー！」

茶色い塊を抱きしめながら教員室に駆け込んだ。

幼稚園の片隅に、かつて飼っていた生き物達の眠る場所があり、所狭しと小さな板切れが並ぶ。古いものはもうそこに書かれた文字さえ読めない。

そこに新しい板が植えられた。りりちゃん と覚えてたの覚束ない文字の書かれた板切れ。佐和子は泣きながら板にウサギの名前を書いた。

その横で園長が語りかける。

「大往生、て言うんよ。りりちゃんはもう年やったけんねえ。皆に大事にされて、嬉しかったよ、幸せやったよ、て言いながら、特によく面倒見てくれた佐和ちゃんに、ありがとう言いながら死んだんだよ。やけん、天国でも幸せにおつてね、てお祈りしながら埋めてあげようね」

死は、そう珍しいものでも無い。

年寄りの多い村では絶えず、どこそこの誰かが何歳で死んだの、という病気で死んだの、そんな話を耳にする。

年老いての葬式は祭だ。

皆、偲びながら思い出話をしていくうちに、葬式はやがて祭になるのだ。

だから佐和子にとつても死はそう遠いものではなかった。

が、ただ一つ違ったことは、自分より小さなものが死ぬということ。佐和子にとって死んでゆく殆どの人間は自分より遥かに大きく見た目にもはつきりとした年寄りばかりだった。だから……

自分より小さく、見た目にも年齢のよく解らないウサギの死が理解できなかった。

墓標を作り抜け殻となった肉体を埋めてもなお、理解できなかった。

佐和子の小さな胸の中で、りりちゃんの死は受け入れられる事ができなかった。

「りりちゃん……」

夜も更けて眠りにつくはずの布団の中で、眠れずに思い出す。

あの時、あの海の中。溺れて苦しくて諦めて、死への扉をくぐりかけた自分を、助けてくれたあの何本もの触手。

誰に話しても「極限状態だったからね、幻覚を見たんよ」と相手にされない。

それでもしつこく話そうとすると、溺れ死にかけたショックでおかしくなったらしいと違う噂が流れ始める。

やがて誰にも話せなくなってしまった。

だけど、あの時助けてくれた茶色いふわふわの塊は確かにあのウサギだった。りりちゃんは死んでいなかったのだ。どういう理由かは解らないけれど、とにかく埋めたはずのりりちゃんは土の中から這い出て住処を海に変えたのだ。

そして、海の中で息ができなくなって苦しんでいた私を助けてくれたのだ……

佐和子はずっとそう信じていた。

年齢が進むほどにそれが如何に現実離れた話であるかを思い知ることになっても、それでも彼女は信じ続けた。

りりちゃんは、確かに海の中で生きていたのよ……そしてきつと今も

引越しをしようと言う母親の提案を拒否してしまう、それが理由。

りりちゃんは、きつと今も海の中で生きている。

海は怖い。溺れたあの日から、ずっと、ずっと、海は怖い。けれどそこにはかつて大好きだったあのウサギが住んでいる。

勿論、中学生ともなった今ではそれを盲目的に信じているわけではないが、あの日自分を助けてくれた茶色い細長いうごめく塊は、今でもはつきりと覚えている。

薄く開いた瞳に入ってきたのは大きな大きなうごめく何本もの毛糸を束ねたような塊。

りりちゃんでもなくてもいい。けれどもう一度……もう一度……自分の命を助けてくれたあの不思議な生き物に会いたい。

「きみは？ 泳がないの？」

後から急に声をかけられ佐和子は驚いて振り返った。

季節は、夏休みに突入していた。

家からほど近い、湾を幾つか越えた所にある小さな海水浴場を包むよう、道なりに広がる堤防の端に腰掛けて幼馴染や都会から帰りしてきた子供達のはしゃぐ様をぼんやりと眺めていた。

ふと後から柔らかな声。堤防に頬杖をつき佐和子を見上げる少年。細い、色素の薄い髪と瞳。白い肌。

「もしかして、泳げない？」

悪戯っぽい笑顔に佐和子はムキになってしまった。

「泳げるわよ！この辺の子供で泳げない子なんて居るわけないじゃない」

「じゃあ何で皆と一緒に泳がないの？ あそこにいるの友達でしよ  
う？」

友達、という言葉に佐和子は返す言葉を失ってしまう。

「友達……なんかじゃないわ」

少年からぶいっつと顔を背けて目線を足元でぶらぶらしていた白い  
サンダルに落とす。

確かに、目の前の海で泳ぎに興じている少年少女達の多くは友達  
と言うにふさわしくない。皆年齢に三つ四つ上下の差はあれどその  
関係は友達と云うよりも遥かに密接だろう。

幼い頃から男女の別無く風呂を共にし、夏、暑い日に遊び疲れれ  
ば風の通る部屋で同じタオルケットにくるまり寝転んだ。歩いて一  
時間もかかる小学校への道のりを朝早く夕遅く共に歩いた。悪戯も  
怒られる時も褒められる時も大概是同じ顔が並ぶ。血こそ違えなが  
らも血縁と呼ぶに相応しい。

しかし、今、佐和子は彼らと共に暑い夏の盛りを謳歌できないで  
いる。

今、というより、あの幼かった恐怖の夏の日から。

一緒に海に入れない、ただそれだけで短い夏の間の日中、佐和子  
は絆から離れてしまう。涼しい夕暮れから始まる花火には加われて  
も、真昼の海を共にできない疎外感。

「キミ、地元の子でしょう？」

ほんの数分、佐和子が想いふけて黙り込んでいた最中、突然に  
会話が戻る。

「え……ええ、あっちの方にちょっと行ったところにある伊浦の子お  
やわ」

「あの辺の子がここまで泳ぎに来るの？ 皆そこの海で泳がないの  
？」

家の目の前の海で泳ぐのは、小学校までの子供だけだ。ある程度  
泳ぎに自信もつき子供ながらに独立心なぞつきはじめた子らは親の  
目の届かない所で遊びたがる。海もまた然り。泳ぐのに、小学中学

年から中学生くらいの子供達はこの大きめの砂利がごろごろと足を滑らせる湾まで来る。ろくにまっとうな設備も無いが、それでも親や親と呼ぶに近い近所の大人達の監視のゆき届かない“名ばかり”の海水浴場は魅力的だ。更に高校生ともなれば車を持った先輩やら友人と共だつて更に遠くの海へ、時には県を越えて砂浜の美しい海水浴場まで行く。

簡単に、少年に説明をしながら「なんで身もしれん子にこんな内々の話しよるんやろ」と不甲斐ない気持ちになつてしまう。その気持ち消し去るように頭を小さく振り少年を改めて見つめなおした。



「あんたは地元の子おやないんやろ？」

佐和子の気持ちを知ってか知らずか、少年は爽やかにただ一言だけ答え返した。

「うん」

しばらくは続く返事を待っていた佐和子だったが、拍子抜けしたようにまたうな垂れる。

普通なら、そう聞かれれば「うん」の後に、どこそこの村の親の里帰りについてきただの大阪だか東京だか、どこから来ているだの程度の答えはついてくるだろう。自分の住んでいる村が隣り合わせた辺りの村の親戚でこのように同じ年らしい子供なら夏の祭りやこの海水浴場で一度か二度は見ているはずだし、子供達というものは初めて知った同士でも随分と簡単に友達になれる。一度友達となれば村を越えて湾を越えて、各家々に呼び合い花火などして短い夏を謳歌しあうもので、近隣の村に夏だけ遠くの街からやってくる子供であつても、大概顔は知っているものだ。

うな垂れながら記憶の糸を辿るが佐和子の頭には、この、細面で華奢な少年の姿がまるで現れない。と、いうことはこの夏初めてこの辺りに来た子供だということになる。

「それで？　どこの子おなん？」

拍子抜けた気持ちをダラダラと引きずるようになつたるい調子の声で問い続ける。

「あっち」少年はゆっくりと海の向こうを指差した。

「あっち……て、海の向こうは九州やよ？」

突拍子もない返事にあっけにとられるが、すぐに思い返して言い直した。

「ああ、あっちゃつたら、先の方の湾かなあ小浦とか四石とか……？」

「うん、まあその辺」

曖昧な返事。『なんや、よう判らん子おやなあ』想いながら佐和子は少年に対して気持ち悪さをちらりと感じた。海に向けて垂らしていた足をくるりと回し堤防を越えさせ道路に下ろす。

「私、もう帰らないけん」

すぐ脇に置いてあつた自転車に飛び乗るとその後姿にまた爽やかなハスキーボイスの声が降ってきた。

「明日も来るよね？　ここ。毎日来てるもんね、佐和子」

「え？」一瞬の間を置いて振り向き、けれどそこには既に少年の姿は無かった。堤防を越えてテトラポットの下にでも入ったかと思つたが、ざわざわと胸をなで下ろす奇妙な感触がそこに足を運ぶのを躊躇させた。

ざわざわと……

ざわざわと……

それは夜の闇の中「ざぶんざぶん」と繰り返す筏と船のこすれる音にとても似て。

きつと、私が自転車の鍵を開けてる間に堤防を越えて海に入ってしまったのよ

もしくは

あの湾の急カーブの向こうに走って帰ってしまったんだわ

でも、何故？

確かに、少年は佐和子の事を知っていた。「佐和子」とその名を呼びかけた。

そして

『毎日きてるんでしょ？』

佐和子がその場所に毎日やってきて海で泳ぐ幼馴染らを日がな眺め続けていたことも知っていた。

何もかも、見知らぬ少年に見透かされていたようで気味の悪い夜だった。

「だけど……」

きつと、あの子は知らないわ。私が毎日見ていたのは幼馴染達の泳ぎなんかじゃなくて……

一つだけ、自分の本当の気持ちが知られずにいたと思える安心が、ようやく彼女を眠りに誘った。

翌朝、母親が出勤した後適当に掃除や宿題など済ませた佐和子は家の前に出て海に向かって叫ぶ。

「ヨシばあちゃあーん」

船付きの筏の上で麦わら帽子をかぶり朝から網縫いをしていたヨシ婆はその声に振り返り「おお佐和ちゃんかあおはようっ」と返す。

「あんなあ、夕べお母さんが買ってきた水羊羹があるけん、よかつたら食べてえやあ」

筏の橋を決して渡ろうとはせずにその堤防の上に水羊羹を乗せた皿を置く。

「ありがとなあ」

佐和子がこの橋を渡ることは決してないだろう。それをよく知るヨシ婆は手を休め、よっこらしよと腰を上げた。佐和子の笑う堤防の側までおつとりと歩きやって来て

「いつもありがとうなあ」

にこにこ皿を受け取りながら笑う。

「ええんよ、ばあちゃんにはいつも畑のもん貰うとるし。おかげで私の小遣いもかなりええことになっとるけん」

老婆が更に笑う。

「そおかあそおかあ、やつたら、今夜もうちの南瓜でも持って行き。ナスもええ頃にできとるけん」

最後にありがとっよ、と笑い残しヨシ婆は羊羹の乗った皿を片手

に筏へ戻った。

本当ならこんな世間話も許されない忙しさの婆さんだ。朝の早いうちに嫁と一緒に山畑の手入れなどして次に棧橋に降りてくる。嫁が家の片付けだの昼餉や夕餉の支度などしている間に網縫いを片付けてしまわなければいけない。船は夜半過ぎに出て朝前に戻る。

筏によつこらしよ、と緩い動作で再び座りまた黙々と網に向う。その後姿を見送っていつもの道を海なりに自転車进行をこぐ。昼にはまだ早いこの時間、あの湾ではもう皆が泳ぎに興じていることだろう。朝の支度と片付けを終わらせてからそこへ向う佐和子はいつも皆と一歩出遅れる。よしんば、足並みがそろったとて一緒に遊ぶわけでもないのだが。

堤防はそのちょうど上にそびえる林が木陰を作り、そこに山から甘い香りを連れて下りてくる風と海面をなぞりながら走り抜けてくる潮の香りを含んだ風が適当に心地よい。自転車をセメントの塊に寄りかからせ「よいしょっ」とその上に腰掛海ではしゃぐ皆を遠目に見おろす。

視線はやがて子供達の塊る浅瀬から離れ自分の村に向う湾のとなき、そして沖合いに流れてゆく。

「やっぱり、今日も泳がないの？」

いつの間にやってきたのか足音も気配も感じさせないで、昨日の少年がすぐ真横で頬杖をついて見上げていた。

「また……」

警戒しながら、呆れながら少年の側から体を離そうとする佐和子の意図とはうらはらに、少年はえいっと堤防を上り海に向って足を投げ出しちょこんと隣に座った。

そこに、車の止まる音が短くキキツと聞こえた。

「おお、佐和ちゃんやないか。なんや？　ボーイフレンドでもでけたんか？」

白い軽トラックから浅黒い顔の年寄りがドアを開け降りてくる。

「澤田のじっちゃん」助かった、とばかりに堤防から飛び降りた。

「ボーイフレンドなんかと違うわ、昨日会ったばかりで得体もしれんヨソの子やわ」

「また、キツイ事言わんと。それよりちょうどええところで会ったわ。ササのええの切って来たけん佐和ちゃんちにも分けたるな。小振りなんが二本で丁度ええやろ」

佐和子の背丈と同じほどの笹の枝を、トラックの荷台でばさばさと揺らされるのを見て嬉しそうに瞳をほころばせる。

「うわあ、助かるわあ、そろそろ自分で取り行かなあかんて思うとったんよ」

「じゃあ、玄関に置いとくけんな」と老人が車に乗り込み「せっかくのボーイフレンドなんやけん仲良おせんとあかんぞ」ニヤニヤと笑いながら再び車を走らせ始めた。

「違うーそんなんと違うー」

走り行くトラックの荷台に叫ぶが届いた様子も無いまま車は緩いカーブを曲がり湾の突先の向こうに消えていった。

「もう……」

佐和子が夏休みに海で泳ぐことは無くとも、他のクラスメイトなどと遊びにも行かずにこうして一人の少年と肩を並べていた事實は、一時間も経てば『あの娘も年頃になりよって、そういえば最近なぞはハツとするほどきれいになりよったからなあ』などと尾も鰭もダラダラと長く連なつて噂となつてゐることだろう。

「ああーあ……」

頭を抱えて堤防に顔を伏せる。にも関わらず噂になるであろうも  
う当のもう一人は涼しい声を佐和子の伏せられた頭にこぼす。

「ねえ、ササつて？」

何を悠長に……今はそれどころじゃ……『あんたのせいで！』罵  
ろつと顔を上げるとそこには興味で大きく開かれた眼が零れ落ちそ  
うな勢いで輝いていた。

もう

呆れはしたものの怒る気はもう失せた。

「ササつて云えばササでしょう。七夕のササよ」

「七夕？」

七夕？ 何を問い返すのか、まさか七夕を知らないとは云うまい。  
そう想いながらハタと気が付く。

「ああ、あんたんとこは新暦なんやろ。こつちでは旧暦で七夕やる  
んよ」

少年が不思議がつてゐるのは八月のこんな時期にササなど用意し  
てゐる事だろう、佐和子は判断した。

「ふうん……」

納得のいくようないかないような相槌を打つ。

「七夕つて、どんなの？」

この地方での七夕がどんなものなのか、と聞かれたのだと佐和子  
は思った。

「こつちではね、まあ、都会と一緒にと思うよ……私がもっと小さ  
い頃はいろいろ違おたんやけど」

懐かしい、遠い昔の情景のようにも思えるが、それはほんの四、五年前までは実際に行事として行われていた光景。

玄関やら庭に願いの短冊や折り紙の輪で作った縄、金と銀の月に星、右に彦星左に織姫。飾り付けられた二本のササを飾り七夕様へのお供えはナスにニガウリ、スイカに桃。そして花ならヒマワリに白い夏百合。

陽が傾き始めれば子供達は各色鮮やかな提灯を手に先頭としんがりに年長の子供、挟まれるように他の子供達。普段家の廻りや山を走り回り海で暴れるように泳ぐ姿からは一転したおごそかさで一列成して海に寄り添い道をゆく。誰かの提灯蠟燭が消えれば他の子からの火を貰い付け直し、何度かそれを繰り返しながらゆっくりととつぷり陽の落ちる頃に合わせて沖に一番近くなる湾の突先に辿りつく。

年長の子の掛け声に合わせて全員が声を潜め胸内で願いなど唱えながら静かに海へ向って提灯を投げる。年長の子達が持ち合わせた三個四個ほどの懐中電灯を頼りに街灯の無い暗い海岸沿いを、ワァーっと暗さと怖さで駆け出したいのを我慢して皆再び静々と戻る。

頼りない月が送る頼りない灯火の中、揺れる淡い影を従い帰る提灯行列。その先には冷えたスイカと花火が待っている。

そうして向かえた翌朝に大人達が見守る中、海に流され沖に消えゆく飾りのササが七夕を締めくくる。

「でも最近は夜子供らだけでは危ないとか環境がどうか言つて提灯行列も無うなったし、ササも流さず燃やしちゃうし」

ごく短い年月のうちに時代の流れを身に染みた。昔懐かしいと言ふにはまだ若すぎるだろうけど、急な時の変化が胸を愁いさせる。

「そうか、あれが七夕なんだ」

遠い沖を眺めながら少年がぼつりと囁いた。

「え？」

「毎年、同じ時期になると色の鮮やかな丸いものや飾りのついた木が流れてくる、あれが七夕なんだ」

「流れてくるって、アナタの所に？」

そう聞かれて少年は齒切れ悪そうに返事をする。

「うん、僕の…僕の…住んでる…いや、とにかく、海に」

そう呟きながらまた遠い沖を見つめる。

少年の横顔が、白く淡く、あの頼りない月の灯火に重なる。

「悪いけど、私、帰らなきゃ。ササがもう来てるはずだし、準備しなきゃ」

昨日はただ『気味が悪い』と感じただけの、少年の横顔が急に現実味を帯びてきたようにも思えて、小夜子はそそくさと堤防から飛び降り、振り返ることなく自転車を走らせた。

月明かりにゆらゆらと揺れる長い影。自分達の歩みに合わせてついでくる。

それは、子供心に不思議で魅惑的で、また、反面で心に刻まれる恐れと不安。自分の動きに合わせてそれは頼りなく動く。

最後の提灯行列をした年に父は死に母子二人となった、先の見えない不安と恐れを見破っていたかのような頼りない月の影。

あの少年は、あの月の影を思い出させる。

汗だくになりながら家の玄関前に自転車を雪崩れ込ませると、小振りだけれど美しく緑に輝く二本のササが並べて置いてあった。

青い香りを放ちながら耳に心地よい葉ずれの囁き。ようやく我に返って顔が火照ってきた。

こっちでの七夕の風習を知らないだけなら、それを説明するだけで良かったではないか。それを、感情あらわに感傷じみた口調で語ってしまった。

何故、見ず知らずの人間にあんな話を……

名前も知らない、どこの村の人の親戚なのか、どこから来ているのか……



何も、知らない。  
けれど、彼は知っている。

自分の名前、そして夏休みになれば殆ど毎日あの海辺を時間の許す限り眺めていることを。

喉の奥に濁った生ぬるい感触が走り抜ける。

その一方で、耳元に残るハスキーな声の涼やかさ。そして奇妙に甘く香るトーン。

そういえば……あの甘い響きには、覚えがある……考えてみる。思い出そうと、頭の奥から胸の奥まで、小さな小人達を総動員させて大掃除している気分になってくる。

気持ち悪い。

けれど、もしかしたら、自分はその少年を知っている……

山の中に溢れる青い蜜柑の香りが佐和子の胸奥まで支配するように流れ込んでゆく。

「ああ、七夕の準備をしなくちゃ……」

一吹の風が笹を揺らした小さな葉擦れに、ぐるぐると回る思考がようやく止まった。

昔のような情緒は失われたけれど、それをする事で母親が喜び、自分もまた気持ち豊かになる。懐かしいあの提灯の光景は無いけれど。

懐かしい、その感覚に胸がキュンと響く。

明日も、きっと、あそこへ行けばあの少年に会っだろう。

いろいろ、聞きたい事がある。聞かなければならない事がある。

台所の窓の向こう側で深まってゆく夏の夕暮れ、ヨシ婆の畑から貰った南瓜を煮る甘辛い香りが言葉無く、佐和子を唆した。

空から降ってくるかのような蝉の声が湾の上で反響し合い、さらにやかましくなる夏半ば。

いつもどおりの朝。いつもどおりの海。一通りの家事を済ませて佐和子が外に出れば道路を挟んだ向かいの海で、村で一番だろうと言われる働き者のヨシ婆が今日も背を丸めて網を縫っていた。

いつもどおりに声をかけ挨拶の二言三言交わした後に自転車を走らせる。淡い水色のワンピースの背中がじんわりと汗ばみ、首筋を流れる数本の髪が汗でうなじに絡みつく。

今夜空では天の川を挟んで牽牛と織姫の伝説が蘇る。

七夕の話を聞いていた少年の様子ではもしかしたらまともに七夕の飾りなど見たことがないのかもしれない。

都会では七夕の飾りなんかせんのだろうか

あまりにも奇妙すぎる謎。

子供の頃幼稚園にでも通っていればそこで経験の一つもするだろうし、ちよつとした街中なら駅や公園、公共の場所でそうした飾りの一つくらいあるものだ。

もしかしたら……そうしたものと縁の無い生活だったのかもしれない……

そう思えば同情の一つも感じずにはいられない。

堤防にちよこんと頬杖をついていた彼を思い出せば夏の盛りだといつのに焼けた様子もない華奢な白い顔。

病気が何かでずっと世間から離れた暮らしでもしとったとか？

昨夜一晚、佐和子はササを飾りながら考えていた。

うつん、もし病氣やったとしても……

顔を横に振り想いなおす。

病氣やったんならなおさら、家族がそういう季節の行事やらして

みせたるうとか思うもんやないやろか？ 入院しとつたんなら病院が療養の息抜きに、て何かしらしてくれるやろうし。

緩やかなカーブを曲がって堤防越しに聞こえてくる海遊びの子供達の喚声。その声を正面から受け止めるように道路に背を向け堤防に小さく腰掛けている白いシャツの背中。佐和子がキキツと自転車を停めた音に笑顔で振り向く、ここ数日ですっかり馴染んだ顔。

「やあ」

堤防脇に自転車を預けるように倒し唇の端を歪めて苦笑いする。

『やあ』て！ 『やあ』て何その挨拶はー

耳馴染みの無い挨拶に心の中が沸騰しそうな勢いで顔が赤らむ。

気障！

「何？ どうしたの？ 今日は何か気分でも悪い？」

自分の挨拶が佐和子を戸惑わせていることなど気付かないで少年はぐつと弓なりに背中を倒し顔を近づけにつこりと笑う。

「ううん、別に……」まあええわ、正面から見つめてくる視線をかわしながら気を取り直し少年から少し距離を空けて堤防に腰掛けた。

何気に腰掛けたものの、とりたて交わす会話も思いつかないまま海側に投げ出した足を所在なげに宙でぶらぶらと泳がせる。潮騒と子供達の遊ぶ声が背中から刺さるほどに鳴き喚くセミの声が二人の頭上でぶつかり、降り注ぐ。

「ふうん」

突然破られた沈黙に慌てて少年を振り向いた。

「今日は佐和子の方から僕の隣に来てくれるんだ」

「そ、そういうわけじゃないけど！」

焦って何と返事したものが、解らないまま口が走る。

「そもそも、最初に私の居た場所に後から割り込んできたのはあんたでしょう、別に隣に座りたくて座ってるわけじゃないけど！ だけどあんたが居るからって私がここに座っちゃいけないなんてこと

あるわけないじゃない」

「うん」

捲くし立てるような口調に少しも驚く様子を見せず柔らかく答える。

「うん、って……解ってるの？　ここは私の場所だったのに、あんたのせいでこの何日か、ちっとも落ち着いて……」

やだ、こんなこと言いたいわけじゃないのに

ちよつとずつ、後悔しながら口走る言葉がだんだんと文句になっていく。

ふと、彼がどんな表情でこの文句を聞いているのか気になって瞳だけが横に動いた。と、同時に頬に柔らかい甘い緑が触れた。

「……何？」

「うん、これ、佐和子が昨日ササの話をしてくれたから」

掌の長さほどの小さな枝に5、6枚の細長い葉がそよそよと風になびいている。

「ササ？七夕の？」

「うん、でも僕ササに飾るものなんて何もないから……これだけ、これだけでも七夕ってできるかなあ」

はにかむように、少年の白い頬が薄く染まる。釣られて佐和子もカアーツと耳まで赤くなってしまう。

「……できるんじゃない……？」

「そうかな？」

「うん、ああ、そうだ、良かったら夕方でもうちに来さいや、うちの飾りわけてあげてもええしお供えもちよつとで良かったらお裾分けできるけん」

「佐和子の家に？」

「せや、うちにおいで。折り紙もようけ余つとるけん、これに合うたこんまい飾り作つてもええし」

少年のかざす小さなササに手を触れる。と、同時に少年の細い指が重なる。慌てて手を引つ込めて、また早口になってしまう。

「うん、あんまり遅い時間やなかったら、夕方過ぎくらいやったらそっちに帰るバスもまだあるし」

少年が柔らかに微笑みながらその様子をずっと見つめている。

「ちよつとやったら花火の一つもやれると思うんよ、何やったら近所の子ら誘おて紹介したつてもええし……」

ようやく落ち着いて覗き込むように少年に振り返る。

目と目が合う。

「な？　そうしい？」

「うん、ありがとう」

「じゃ、うち、場所解るやるか？　そのバス停から乗ったら三つ目の停留所で福浦いう所やけん、そこで降りてそのまんまバスの進む町の方に向って歩いてつてな、何もない荒れた庭に百日紅の木が二本、白いのと赤いのが並んである家やから」

「サルスベリ？」

「うん、小さい花がたくさん集まって手毬みたいにまあるくなつたんが幾つも木になつとるんよ。木の幹は縦に茶色い縞がずっと入つててのつぺりしたつるんつるんの木」

こんな、こんなと両掌で丸を作り花の形を説明する。

「あの辺で紅白の百日紅植えとるの、うちだけやからきつとすぐ解る思うよ。それで解らんかったら近所の人にでも聞けばええけん、やから……」

「ありがとう」

話し続ける佐和子をやんわりと制して少年が口を挟んだ。

「でも……」手に持っていたササを佐和子の目の前に差し出し

「これは佐和子にと思って……よかったら一緒に飾ってやってもらえないかな」

「私に？」

「うん、僕から、佐和子に」

差し出されたササをおずおずと受け取りながら佐和子は少年を見つめる。少年も佐和子の目を見つめながら「ありがとう」と囁いた。

「ありがとう、て……貰おて、ありがとう言っんはこっちやわ……」

吸い込まれるように見つめる少年の瞳から視線を逸らすことができない。

「うっん、誘ってくれて。だから、ありがとう」

微笑んだかと思うと少年が身を翻し道へ降りた。

「ありがとう、佐和子」

そのまま振り向くことなく緩いカーブの向こうに白い背中が消えてしまった。

「百日紅やから、白と赤の二本の百日紅がうちの目印やから、ほんとによかったらおいでよね！」

もう足音も聞こえない。堤防の上に立ち上がり手渡された小さなササを頭の上で大きく振り回しながらカーブで消え行く道の向こうに、大きく叫んだ。そして、もう見えない少年の背中を十分に見送りながらササを眺め思った。

「これも、飾ったげよう。もしかして本当に来たらきつと喜ぶやろうけん……」

山沿いに登り始めた上弦の月がその姿を海面に映し頼りなく波に揺られる。

供え物の飾られた縁側に佐和子はシンと立ち尽くしその様子を見ている。

来るだろうか

もしかしたらものすごく突拍子もない事を言ってしまったのかも  
しれない。考えてみれば少年は自分の事を知っている様子だったが、  
佐和子自身は彼のことをまるで知らないというのに、あんな風に誘  
ってしまった。こんな夕暮れの時間に家に来いなどと。

飾られたササが風に吹かれてしゃしゃらと音を立てる。

佐和子の手には小さく小さく作られた折り紙の輪飾りと小さな小  
さな短冊が三枚吊るされ、ササが揺れていた。

「佐和子お晩御飯は食べんのね？」

「うん、お母さん先に食べといて」

すぐ後の和室から聞こえる母の声に上の空で返事を返す。

しばらくすると食事を終えた母親も縁側にやってきて娘の隣に腰  
を下ろした。何を言うともなく黙って蒸し饅頭の乗った盆を佐和子  
の前にそっと出す。

まあ、年頃の子おの夏やけんね

解ったような解らないような解釈をつけ、海の上に瞳を泳がせる  
娘の横顔をただじっと見守る。

月はゆっくりとゆっくりと昇り、それに合わせて海面の月も沖に  
向って流れてゆく。

あの海水浴場の方面からこちらに来るバスはもう終わった。

林の影の下、淡く微笑む少年はとうとう姿を現さなかった。

「まあ、本当に来られても困るんやけどね」

見ず知らずの少年を母親に何と説明したものか、考えあぐねてい

たのも事実。ホツと胸をなで下ろす。同時に例えようのない淋しさが冷たく胸に突き刺さる。

昼間貰ったササの香りを嗅いだ。ふわっとするよなう酸っぱ甘さはササの本来の緑臭いそれとは明らかに違う香りだった。それはいつもあの少年から風に乗ってやってくる香り。妙に懐かしく胸の奥がざわざわと揺れるあの香り。手渡されてから随分と時間が経ったせいか、ササにはもう残り僅かな香しか残っていなかった。

遠い沖で月が揺れる。その灯りの中、波も揺れる。

ぽちゃん、と聞こえたような気がした。

別に珍しい物音ではない。海の側に住んでいれば波が堤防にぶつかる音、船が筏にこすれぶつかる音、何かしらいつもうるさく聞こえてくる。

ただ、佐和子にとってその時それが妙に気になったのは、その音がああ遠い沖の揺れる黄色い灯りの中から聞こえたような気がしたから。

「まさか、あんな遠くから……」

音の聞こえようのはずはない。きっと目の前の海で小石の一つも落ちたのに違いない。そう想いながら足が無意識に動く。草履を履き百日紅の下をぐり道を越えて堤防を覗く。

ぽちゃん……

また、聞こえた。今度は間違いない沖の方から聞こえる何か。

「……何……？」

揺れる黄色い影の中、もう一つ揺れる茶色い影。波間の影とはあからさまに違う、単体で浮いるような何か。ふうわりと大きく揺れているかと思えば、じつと波に身を任せるまま揺らいているだけの



ようにも見える。

ぽちゃん……

また、はつきりと聞こえたそれは確かにあの茶色い影から響くもの。佐和子は何の確証もないがそう信じれた。

あれは……あの茶色い影は……

魚ではない。船でもない。茶色い丸い海の生き物。

佐和子だけが知っている生き物。あの溺れた夏の出会い。

「りりちゃん！」

随分長い間口にすることのなかった名前を叫んでしまった。

まるで佐和子の声が聞こえたかのようだった。

ぽわんと一度大きく浮かび上がり茶色い体を膨らませやわらかな月灯りの中に白い雫をきらきらと散りばめた後、静かに静かに、揺れる海面の月の下へと消えていった。

「りりちゃん……」

目を疑うような光景に再びその名を口にする。

母親が何事かとつかかけを爪先にひっかけながら駆け寄ってきた。

「何、大きな声出しよんの」

「今、海のおつちの方に……」

「海に何か？」

ハッとして口籠る。

「うっん、何でもない」

「何でも無いんならええけど……大きい声出しよるから何事か思ってたやない」

ホッとしながら母は「さあもう遅いけん家に入り」と佐和子を促しながら玄関に戻る。

「うん……」

何度も何度も、沖の方へ振り返りながら戻り潜る百日紅の門。  
窓から差し込む月灯りだけが頼りの薄暗い部屋の中、布団に潜つて目を閉じてみれば更に鮮明に蘇る記憶。先ほどの沖に浮かんだ塊と重なるあの夏の日の経験。

不思議に甘い香りのする空気の中、トントンと優しく背中を叩いた茶色い触手。細長い一本が唇にそっと触れ、直接流し込んで来た甘い空気。

同じ？

先ほど見たあれとあの日のあれは同じ生き物なのだろうか。

解らない……

助けられて意識も体力も戻った頃、自分がどうやって助けられたか、話す端から笑われた。誰も信じてはくれなかった。信じて欲しくて何度も記憶の断片を手繰り寄せながら説明したが、やがて佐和子自身、とうとう口にする事もなくなってしまった。

誰も信じてくれない。けどあれは絶対に、大人たちの言う「極限状態で見た子供らしい幻」なんかじゃない。りりちゃんは、確かに存在するんだ……年頃になり、父を失った現実の生活の中で、それをりりちゃんだと思い込んでいた気持ちは薄れてきたけれども、違う形で、りりちゃんにとてもよく似た海の生き物……きっと誰もまだ見たことのないような未確認の生き物がこの近くの海に生息していて、自分を助けてくれたのだ……そう思う気持ちはじつと静に佐和子の胸内で育っていった。

いつか、必ずもう一度あの生き物に会いたい。その気持ちだけでいつも海を見ている。夏ともなれば、自分が大人たちに発見されたあの場所、今では堤防が道と海を隔てて続いているがあの頃はまだ工事中だった、テトラポットの並んでいた地元の子供達が遊ぶ海水浴場。

早朝から、佐和子は庭の隅に古いドラム缶を置いただけのゴミ焼

き場でササを燃やした。母親も出勤を少し遅らせて付き合ってくれた。

「それは？そのササは燃やさんでええの？」

聞かれて、手にしていた小さな飾り付きのササをぎゅっと握り締める。

「うん、これは……流そうと思おて」

佐和子の家の庭で飾ったとはいえ、あの少年が取ってきてくれた一枝、できれば彼にも七夕の締めくくりを一緒に見送らせてあげたい。

いつもの堤防でいつものように「やあ」「おはよう」と短く言葉を交わした後、二人は自転車置き去りにして少し歩いた。海水浴場に入る細い砂利道を過ぎるとその先には、湾を囲むように高い木々を抱えた森がうつそうと茂っている。暗い涼しい遊歩道を行けばその先には小さな灯台がちょこんと置かれ、眼下の崖にぶつかり飛び散る波しぶきを見守っている。

「こつからやったら、沖まで流れると思うんよ」

遠い沖を指差し少年に示し佐和子は最後にもう一度だけ聞いた。

「ほんとに？ 何も願ひ事書かんと流してしもうてええの？」

崖の下風景をまるで初めて見るかのように呆然と眺めていた少年は「うん、このまま流そう」嬉しそうに小さく笑った。

「じゃ、投げるよ」

腕を大きく振り上げ枝を投げるとそれは宙で弧を描きながら落ちてゆき、波間に喰われ消えていった。

しばらく灯台の元で座り込み黙ってササの消え行く様子を眺めていたが、ふと佐和子が疑問だった事を口にした。

「あんたさ、いつもあそこでボーっとしてるけど、面白いん？」

せつかく田舎に来とるんだから他に遊び行ったりすればいいのに」「くすくすと笑いながら彼が答える。

「佐和子こそ、毎日あんな所でボーっと夕方まで海を見ていて。友達と遊びに行くとかすれば楽しいだろうに」

「私は……別に……」笑われて照れて目を逸らせば

「泳ぐわけでもないのに」とまたからかうように問われる。

昨夜見た海に浮かぶ茶色い影。

何年ぶりだろう、急に思い出してしまった。

あの日の幻のような奇跡を、誰かに信じて欲しいと、聞いて欲しいと想いながら一生懸命語っていたあの頃の自分。

誰に話しても信じてはもらえない。影で笑われていた事も知っている。けれど今、また思い出してしまった。

信じてほしい、聞いてほしい。誰かに。ずっと、ずっとそう胸に秘め、海を眺めながら探していた。

「私ね、小さい頃、この海で溺れたことがあるんだよ」

一瞬、少年の存在も忘れた。まるで独り言でも呟くように言葉が出てきた。

「もう、死ぬかと思おた。苦しくて、そのうち苦しくも無くなって、目の前で自分の吐いた息が泡になって遠くなっていくの、覚えてる……」

「ええんよ、信じんで。ただ、私が勝手に信じてここですっと探してるだけやから。ここにおっいたらいつかまたあのりりちゃんに似た生き物と会うことができるかもしれんて勝手に信じてここに来とるだけやから」

あの幼い日の不思議だった出来事をすっかり喋り終えて、どうせこの少年も信じずに笑い飛ばすだけだろうと思い、ほのかに染まった頬を隠すように顔を背けた。

ろくに知りもしない人間に自分の事を随分と語ってしまった。幼稚園の時死んだウサギのりりちゃんの話まで。何て恥ずかしい事を……話すだけ話したものの、後悔が次から次に胸中を走る。

「うん、そうだね」

ああ、やっぱり！この子も信じやしないわこんなバカみたいなお伽話！

「自然はまだまだ未知数だから、海だって、人間に知られないまま生きている生物がたくさん居たって当たり前だもん」

「……え？」

初めての肯定。驚きながら胸が高鳴る。

「人間が人間の知る限りの生物しか認めないなんて、その方がおかしいよ。海には不思議な事も現実で計りきれない現象も幾つも現実起こっているのに」

そつと首を横に向け見つめた少年の顔はじつと海を見つめている。

「……信じてくれるの？」

頼りな気な佐和子の言葉に彼が優しく振り返る。

「海にはいっぱい不思議な事があるんだよ」

謎。テレビなどでよく特集されるUFOや心霊現象から始まって

……

例えば集団で海岸に打ち上げられるイルカや鯨だったり、メスの卵子をオスが体内に取り込み孵化させるタツノオトシゴ、稀に浜に打ち上げられるリュウグウノツカイ、月に支配される珊瑚の産卵……現代の科学では解明されない神秘はいくらでも、どこにでもひっそりと存在している。

「他にも、深海にまで手を伸ばせば、そこはもう謎ばかりだよ。

佐和子の言う人間を助ける茶色いふさふさの生き物が居て、この海に流れ着いていたとしてもあり得ない話じゃないだろう」

見詰め合った視線の狭を夏の涼しい木陰の風が走り抜ける。

「ほんとにそう思う？」

笑わずに聞いてくれた。それだけでも嬉しかった。けれど彼はそれ以上に自分の話を認めてくれた。言葉で表現しきれない感動で胸

がドキドキ高鳴って涙が溢れそうになる。

「思うよ。だって……」

何かを言いかけた。けれどそのまま口は閉じられ、彼の視線が遠い波間に戻る。

だって？

その先を聞きたいと思った。が、先ほどまでイキイキと海の不思議を語ってくれた時の瞳の輝きが急に静かに冷えていった。寂し気に。

佐和子の戸惑う空気を読んだのか「さあ、もう行こうか」立ち上がり手を差し出した。掴んだその掌は海辺育ちの少女のそれよりもずっと薄くひんやりと儚げで……一度掴んでまた離してしまったなら二度と触れることができなくなるような気がして……少年の歩く一歩後をゆっくりとついてゆく。

踏みしめる落ち葉がざくざくと音を立てる。

どちらともなく黙り込んでしまった。

少年は振り返らない。佐和子も顔を上げられずにただじっと繋いだ掌だけを見つめて歩く。

遊歩道の出口になってようやく、道路を走る車のエンジン音が聞こえ始めた所で少年が掌をほどこいた。とても自然にすつと指を開きズボンのポケットに向って腕を動かし

「こういうところ、知った人に見られるの困るんでしょう？」

ササを採ってきてくれた澤田のじつちゃんにボーイフレンドができたのかとからかわれた事を言っているのか。つい先ほど見せた静かに淋しげな瞳に悪戯っぽい笑顔が戻っている。

思い出したように佐和子も「そうよ、困るわよ！」慌てて掌をワンピースの裾でゴシゴシと拭いた。その様子を見ながら少年がまた更に声を上げて笑う。

「でもさ、佐和子、もう一度その生き物に会いたいと思うのならこっうやって遠くから眺めてばかりじゃダメなんじゃないかな？」

「どついう意味よ」

「泳いで、沖まで泳いで。もしかしたらその生き物も佐和子を待っているのかもしれないでしょう?」

「待ってる?」

「うん」

待っている、あの深い海のどこかで。この沖のどこかで。

けれど同時に思い出す、沈むほどに身動きできなくなる、取り巻く水のしめつけるような圧迫感。廻りはどんどん暗くなっていく。

飲んでしまった水で鼻の奥から喉の奥まで痺れる激痛。

怖い

怖い

怖い……

「でも、私やつぱり……」海で泳ぐことはできない、最後まで言い切れずに言葉を飲み込んだ。彼が小さく「ごめん」と呟いて佐和子の髪をそつと撫でた。

その行為に驚いたのか、照れてしまったのか、佐和子は咄嗟に彼の指を払いのけて

「そういうあんたは泳がんの? いつも見てるばかりで……」憎まれ口を叩いてしまう。

「うん、僕は泳げないから。人のいる場所では」

真面目なのかふざけているのか判断のつかない表情と口調でさらに佐和子の問いをかわす。

「何よそれ……結局泳げないってこと?」

「まあそんなとこかな」くすくすと笑いながら堤防に向って早足で歩く。影が長くなってきて夕暮れに少しだけ近づいた午後。



ずっと、ずっと探していた

暗く冷たい深海から、ほの明るい暖かい海面近くを行き来しながら。

気の遠くなるほど彷徨い続けた年月はその目的さえ忘れさせ始めるほどに。

けれど見つけた。

あの奇跡の日。

やっと 見つけた。

やっと 巡りあえた。

そして、あの時からずっと、ずっと、見守ってきた。見つめてきた……

人影の消えた海岸でゆるりと滑るように沖へ向う茶色い影が眩いた。

もうすぐ、きっと、もうすぐ

夏の時が駆けてゆく。

盆の迎え火を焚く頃には子供達の姿も海から消える。その季節限りの賑わいは徐々に静けさを取り戻し次の季節への序奏を始める。

ほの青いトンボがずっと二人の間を抜けて行った。

人気の無くなった海を前に二人は変わらずその場所で、少しだけ距離を空けて並んで座って沖を見ていた。初めて知り合った頃は間にもう一人くらい人の入るほどの距離だったのが今日はトンボ一匹がようやくするりとすり抜けるほどに近くなっていた。残暑の下で

山から吹き抜ける木陰の風が涼しい。

「もう誰も泳ぎにこないんだね」

「お盆やもん。これからはもう誰も海では泳がんる」

盆を過ぎた海は遊びの海では無くなる。

三日後の送り火を合図にするかのように海岸端では薄白く大きな海月がまるで来る者を拒むかのようにふわりふわり漂い始める。

「ふうん、もう誰も来ないんだ」

いつもと違ってかわった静けさに気を抜かれたような感じで二人の言葉もどこか上の空、宙を漂うように流れて消える。

海に向って飛んだとんぼが少し先でくると旋回し戻ってきて少年の鼻先をかすめながらまた木陰に消える。

「忙しそうに飛ぶなあ」

クスクスと彼がいつもの調子で軽く笑う。

思い出したように佐和子が聞いた。

「そういえばあんたはいつまでこっちにおるん？」

「いつまでって？」

不意を付いた問いかけに彼は佐和子を見つめ訪ね返すが、佐和子は少しうつむいたまま、足元に並ぶテトラポットの陰にうごめく舟虫の群れを見つめたまま。

「だって、夏休みで田舎に来とるだけなんやろ？都会なんかから遊びに来とる子らは盆が終わったら大抵帰ってしまうけん、あんたもそろそろ帰る時期なんと違うん？」

「帰る……そうだね……」

佐和子を見つめていた瞳が流れるようにふっと沖に向けられた。

帰る、うん、帰るよ、もうすぐ

最後の言葉を飲み込んで静かになってしまった少年の横顔を盗み見るように、うつむいたまま目だけ動かし覗き込んだ。

やっぱ、よう解らん子だわ

灯台からずっと手を繋いで歩いてきた。冷やかな薄い掌。彼の

事を何も知らない佐和子だったが、あの僅かな時間、手を繋いでいる間だけ佐和子は彼の謎めいた不確かな部分を全て忘れ去り、とても身近に感じてしまった。

あの自然に触れ合った一時が今はもう無い。

あの一時を思い出しながら佐和子はじっと掌を見つめ思い出していた。

もう一度手を繋いでみたい……それで少年の何かが解するというわけではないのだけれど、あのとても身近に思えた瞬間をもう一度感じてみたい。触れ合って、それで彼の何が解るとうものではないのだけれど。この謎の多すぎる少年の解らない部分を飛び越えて通じ合う何かを感じる気がする……

掌から意識をずらし、もう一度少年を振り返る。

目と目が合った。

どきりと佐和子の胸が高鳴る。

「手、どうかした？」

真っ直ぐに問いかけてくる彼の唇の動きに、じっと見つめてくる瞳にどぎまぎして言葉が詰まる。

「べ、別に……！」

戸惑いを隠すように慌てて堤防の上に立ち上がりスカートのお尻の部分をぱさぱさと叩きながら細かい砂利を払う。

「私、もう帰らな……」

「そう？また明日もここに来るよね？」

彼がそう聞いたのは、急に誰も来なくなってしまった海を見ていてもしかしたら佐和子も……と、思って不安になってしまったから。

いつもと変わらず日がな一日遊んでいた子供達が突然姿をそこから消した。佐和子も、このお盆という行事を境にここから姿を消してしまうかもしれない……

そうなってしまったら僕は……

「しばらくは来れんよ……お盆の間は」

不安が的中してしまった。

「もう？ 来ないの？」

「うん、お盆の間はちよつとね、家をあんまり空けたくないよ」  
盆には死んだ家族が帰ってくる。その為の迎え火、その為のご馳走。その為の花。その為の掃除。盆の間は帰ってきた懐かしい人達のためだけに家中が廻る。

「私も何だかお盆の間はお父さんやじいちゃんばあちゃんたちが居るような気がして、何となしやけどあんまり留守にようできんのよ」

「そう……」

「今時の若い子の考えることやなくて、お母さんは笑うけんどね」  
照れて笑いながら語る佐和子の言葉を一言一言噛みしめながら彼は聞いていた。

「じゃあ、そのお盆が終わったらまたここに来る？」

「え？」

少年の黒い瞳の奥が懇願するような含みを込めて揺れて見えた。  
佐和子にはその表情をどう解釈していいか解らずに「うん、まあ」  
曖昧に答えるしかできなかった。

そしてそれは盆の間の僅か数日間彼女をちくりと悩ませ続けた。

あそこへ行こうか……

行けば少年がいるかも知れない。自分を待っているとは限らない  
だろうけれど。一人でぼつんと沖を眺める少年の姿を想像するとやりきれない思いで切なくなる。

しかし徐々に連休をとった母親とゆつくり過ごせる貴重な期間。  
二人で父と祖父母の思い出に浸りながらのんびりと過ごせるのは盆と正月の他に無い。昨日会った少年の様子では本来彼の住む街へ帰る様子は少なくとも夏休みの間は無いのかも……自分で自分に言い聞かせながら、けれど家の前の海を見ればやはり彼のことが気にかかってしまう。

彼が気にかかりながらも過ぎてゆく三日間。静かな雨の中、軒下で焚いた送り火の煙が昇る夕暮れ。

「もうお父さんもじつちゃんばあちゃんも帰ったかねえ」

夕食の後佐和子の母親がテレビの画面をぼんやりと眺めながら呟いた。

「そうやねえ」佐和子の返事はどこか上の空で、それはこの盆の間その調子だった。

何か思う所でもあるんやろうか

心配事が悩み事でもあるのなら聞いて力の一つにでもなつてやりたいと思うが、親の方からあまりあれこれ先走って聞かれるのも五月蠅かるうと思いとどまる。

「ねえ、佐和子」

「うん？」

二人とも視線はテレビから動かないが番組の内容は頭の中に入つてこない。流れてくるアイドルの歌声と客席の甲高い声が宛てなく宙に漂い消える。

「お父さんが死んでからあんたには苦勞かけとると思うんよ。家のことなんかで友達と遊びにもよう行けんで、なのに愚痴も言わんとほんとにようやってくれとると思うんよ」

「……ん……」

頭の片隅で急に何を言い出すのだろうと思ひながら『ああお盆やもんね』と母親も感傷的になっているのだと解釈しながら相槌をうつ。

「ありがたいなあて思ってる」

「……ん……」

せめて一言くらい母親らしい事をと話しかけた言葉を覇気の無い娘の返事で諦める。

まあいいわ。年頃の女の子だもの、いろいろ考えることもあるわよね

そういえば自分もその年頃には母親に内緒で交換日記の一つもし

た男の子がいたりしたものだ……そう思えば娘の思春期らしい“ほんやり”も懐かしく可愛く思えなくもない。

「あのね、佐和子」

「……ん……」

「好きな男の子とかできたら、お母さんにもどんな子が教えてよね」

「何それ」

突然に、今まで話題にされることのなかった類の話をされて呆れるやら驚くやらで母親をようやく振り返る。

「別に」

「別につて……」反論しようとしてまるで思い当たる事が無いわけでも無いことを思い出した。そういえば昨日母親とヨシ婆が畑で立ち話をしていた。もしかして澤田のじっちゃんから流れた噂が耳に入ったか……いや、どちらにせよ他の幼馴染達も遊んでいるあの場所少年と肩を並べている所を散々他の人にも見られているのだから噂にならないわけがない。

「違うわよ、そんなんじゃないんだから」

「そう?」ふふ、と笑う母親に対して更に慌てる。

「そうよ、絶対に絶対にそんなじゃないんだから」

「まあ、そのうちお母さんにも紹介してね」

最後にそう言い残し「明日からまた仕事やけん先に休むわね」隣の部屋へ姿を消した。

「もう……そんなんじゃないのに……」

半ば呆れ、怒りながらパタンと閉じられた襖にぶつぶつ言いながら湯呑に残された麦茶を飲み干す。

一方、襖の向こう側では母親も布団に入りながら聞かされた噂話を反芻していた。

この付近の子ではないらしい。どこか違う村の親戚の子供か。昼前から夕方空の色が変わるまで海水浴場前の堤防ですっと話をしているらしい……

清く正しい男女交際じゃないの。あれこれ五月蠅く言っても感情逆立てるだけよね……それにしても……

そう、この付近の子でないとすればいずれ夏が終わる頃にはどこか街か都会か帰ってゆくのだろう。そうしたら娘はどうするのだから

う……

文通でもするのかしら

年頃になってきた娘が急に愛しく思え「可愛いこと」声には出さずふふふと笑いながら眠りについた。

台所では洗い物を片付けながら佐和子がまだぶつぶつ言っていた。

「だいたい、あれが母親の言うこと？ 親だったら子供が知らん男の子と仲良おしとったら心配になるもんやろうに、紹介してよねって……」

食器を洗い終わるで時計を見ると針は十時過ぎを指していた。

「私ももう寝なきゃ」

最後に玄関の鍵を確認して休もう、サンダルを足先にひっかけて土間に降りた。

ちゃぼん

目の前の海から何かが聞こえた。  
同時に、七夕の夜を思い出した。

ちゃぼん……

まるで佐和子を誘っているかのように。

慌てて、しかしそつと注意深く玄関を開け海の側へ行く。そこには何もない。ただ雨上がりの湿った空気に波が漂うだけ。遠い沖に目をやるが雲に隠れた月のせいで海と空の境もわからない。

が、佐和子はその暗い沖に再びそれを見た。ぼんやりと光る影はゆらゆらと漂いながら波間に現れたり隠れたりしながら動いている。その度にまたちゃぼん、ちゃぼんと響いてくる。

聞こえるわけがない。本来ならそんな遠くの波間の音なんて、聞



こえるわけがない。けれど確かにその塊の動くに合わせてちやぽんちやぽんと繰り返す。

しばらく同じ場所で潜ったり現れたりを繰り返していたそれはそのうち海面を滑るようにすすつと一つの方向を目指し進み始めた。

「あつちは……」

いつも、少年と会っていた海水浴場の方向。急な胸騒ぎ。迷う時間もなかった。

サンダルでパジャマのまま、街灯も月灯りも無い淋しい夜道を自転車のライト一つに身を任せ走り出した。

昼間なら十分とわからない道のりを暗い夜道のせいで時間がかかる。緩いカーブの先が見えない不安。だけど……

行かなきゃ、急がなきゃ……

沖に見えたあの影は確かにあの方向に流れて行った。佐和子の特等席。いつも夏が来ればそこで日中を過ごし海を眺め続けた場所。

この夏はあの少年と出合った。

ぽつ、ぽつ、と柔らかい雨がじんわりパジャマの肩を濡らす。山から降り下りる雨の匂いに混じってふうわりと固く青い蜜柑が甘酸っぱく香る。

緩やかなカーブの向こう。ここを曲がればあの海が見える。八年前、溺れた場所は家の前の海だった。けれど無事発見されたのはいつも少年と会っていた堤防の下に並んだテトラポットの上。ヨシ婆にその時の話を聞けば、仰向けに穏やかな顔色で寝息をたてていたという。

潮の流れに不自然に逆らってどうやってあの場所まで辿りついたのか、不思議なこともあるもんだと首をかしげる大人も居たが「それにしても助かって本当によかった」と締めくくられそれ以降話題に上ることもなかった。

「きつと海の神さんが佐和ちゃんがあんまりこんまいけん不憫に思うて助けてくれたんよ」

ヨシ婆が小さな頭を撫でながら、誰も自分の話をまともにとりあってくれないことで悔しいやら切ないやらで悶々としていた佐和子の気持ちを慰めた。

当時を思い出しながら最後のカーブを曲がる直前で自転車を漕ぐ足が止まってしまった。

ちやぽん

確かに、聞こえる。海に落ちる雨の音ではない。

ちやぽん

耳を澄ます。船が揺れて波を立てる音でもない。

軽やかに水を切る音が次はずりずりりと重たそうに何かを引き摺る音に変わった。

ゆっくりと何かが海から這い上がってくる気配に鼓動が駆け足を始める。体中の血液がふつふつと湧き上がるようで、頭の芯まで熱くなってしまう。

見たい。このカーブの向こうを。

しかし……そこにあるのは自分が期待している何かでは無いかもしれない。

「そうよ、もしかしたらただの酔っ払った誰かが落ちただけかもしれないじゃない」

考えてみて、ハッと我にかえる。

「だったら！ 余計グズグズしてる場合じゃないじゃない、助けなきゃ！」

山肌にしがみつきながらおそろおそろ顔を出す。

暗い海。

けれど夜道を走ったおかげで暗さに目が慣れている。テトラポットの上に動く何かがぼんやりと見える。

「やっぱり、誰か海に……」

助けなきゃ、そう思って飛び出そうとした時だった。  
はつきりと目に映ってしまった。

しがみついていた山肌に体が張り付いてしまっただけ動けない。先ほどまで興奮で震えていた体がぴたりと硬まり、まるで自分がその風景の一部として吸い込まれてしまったような感触。

大きく見開いて瞬きする事も忘れてしまった瞳に映し出される、テトラポットの上を重く這うように動いていくソレから意識も視線も背けることが、できなくなってしまった

全身を覆う茶色く細い触手達がわさわさと蠢きその先がピツピツと伸び縮みしながら水滴を払う。最後にぶるぶると大きく震え完全に水気を切ってしまうと、まるで暗い空を仰ぐように大きく伸び上がりふわっと全身を膨らませ、まるで深呼吸をするかのようにしぼんでゆき、ゆっくりと、下の方から形を変え初めていった。

周辺の触手が撒きつくように細い棒切れのようなものを二本、形を造ってゆく。と同時に形造られる先端から茶色い表面は冷たく透き通るような白へと変化していく。

二本は途中から一本になり上の方へ行くと左右に一本ずつ細い枝に別れて、また一本に戻る。

今ではすっかり解る。海から這い上がってきた毛玉のようなそれは確実に人の形を造っていた。細い首の上に小さな頭が完成する頃にはもう、蠢いていた無数の触手は見ると影も無かった。

降っていた雨が止み雲に隠れていた月がぼんやりと現れはじめ「さあ見てごらん」と生温かな風が佐和子にささやくように耳元を舐めるように通り過ぎる。

シャワーのように降りてきた柔らかい灯りの中、照らされたその後姿を見て佐和子は心臓が凍り止まるかと一瞬感じた。

「まさか……」

固まっていた体が動揺で震える。

カラリ……指先に触れていた山肌が動揺に反応するように一群れの小石をアスファルトに転がした。その音に月灯りの中浮かぶように背中を向けていた人影がゆっくりと慌てる風も無く、音の響いた方向を振り返る。

目と目が合った、ような気もしたが、振り返られた瞬間に佐和子はまるで、悪いことをしている子供が大人に見つかってしまったような気持ちに襲われ山肌から跳ねるように離れ再び自転車に飛び乗

った。

来た時よりは若干明るくなった道を駆けるように走る。

「あれは……あれは……」

汗がどつと噴き出す。

「あれは……」

テトラポットの上で彼は佐和子の消えて行った方角をしばらくじつと眺めていたが視線を足元に落とすような垂れて小さく呟いた。

「見られた……かな……」

できあがったばかりの色素の薄い髪に残された最後の一滴がつつ…と華奢な肩に流れ落ち、はじけるように散って消えた。

徐々に高くなり始めた空に白い雲が風に弄ばれ形を変えてゆく。

「暑さ寒さも彼岸まで言うけど、ほんまにえらいんは盆過ぎてからのこの時期やお」陽よけにほつかむったタオルで額に浮かぶ汗を拭きながら、腰を屈め黙々と菜っ葉を間引くヨシ婆を手伝いながら「婆ちゃんそれ毎年言うなあ」と佐和子は笑った。

「そうかのお、そしたら去年も言うたんやろおか」ハハハと声を上げてヨシ婆も笑い答える。

くすくすと口の端で笑いながら佐和子は目が笑っていないかった。

菜っ葉を機械のように抜いては放る佐和子をちらつと横目で確かめヨシ婆はまるで独り言のようにぼんやりと呟いた。

「そつえば今日は行かんでええんかいの？」

言われていることは解るが聞こえなかったようなふりで手を動かしながら続ける。

「どこぞから休みで来とる子やつたら、もうじきいんでしまつんやなからうかねえ寂しいこつちゃ」

「なんで……」何故ヨシ婆がそんなことを……最後まで言おうとし

たがヨシ婆がそれを遮るように続ける。

「今朝なあ用事でちよつとあつちん方行つたらぼつーんと一人でおつたなあ」

ひとりで

あの夜からちようど一週間を数えていた。溺れて助かった翌年から、夏休みとなれば登校日の日でも学校から帰ると昼ご飯もそこそこに駆けて行つた。一日と空けず通つたあの場所に一週間も行つていない。

「よつぽど大きい台風ん時以外毎日行つとつたろ。何ぞ喧嘩でもしたんか？ そやつたら、早う仲直りせんと。休みが終わつて街にもんてしもつたら話もでけんようになるんと違うか？」

喧嘩やつたら、ええんやけどね……

確かに、喧嘩ならどちらかが先に謝れ済むこと。しかし、見てしまつたあの夜。

海から這い上がってきたのは懐かしい懐かしいあの生き物。ずっと追い求め探し続けた溺れた佐和子を助けてくれた生き物。いつか必ずもう一度会えると信じて沖を眺め続けた夏の日々。待ち続けるうちに、確かにあれはりりちゃんではない。けれどももしかしたらりりちゃんが海の生き物として生まれ変わった姿なのかもしれないなどとも想い始め、いつか会えたら……いつか再開できたなら例え言葉は通じなくともあの不思議な茶色い塊に向つて「ありがとう」と伝えたい。そう思いながら。

「来年もまた会えるとは限らんでなあ」

「婆ちゃん！」

「何ね、急に大きな声だして」

「よう知つとる年頃の娘が知らん男の子と親しくしとつたら普通はあんまりええ顔せんもんやない？」

「そうかのおそついうもんかの」

ヨシ婆はまたハハハと笑つた。

「そつよ、そついうもんよ」

てつきり佐和子が照れてしまったものと思ってヨシ婆はそれ以上に言うのをやめた。草むしりで曲がった腰を「うーん」と伸ばしながら立ち上がり

「佐和ちゃん今日はもうええけん、ありがとうなあ」

言いながら傍らで実っている茄子をもぎ採り佐和子に向って放り投げる。

「今年は茄子もにがうりもよおでけた、いつもいつも手伝ってくれてありがとうなあ」

「うちこそ、いつもいろいろ貰おて。今日の晩はこれ焼こうかな」

顔をほこらばせ胸元に飛び込んできた二本の茄子を抱え込むようにキヤツチする。

「佐和ちゃんもおせらしゅうなつたなあ」

しみじみとヨシ婆が呟いたのを聞き逃し「え？」と振り返り聞かえすが「いいや、何も」につこりとかわして

「さあて、そろそろ蜜柑も忙しゅうなるな」やれやれとまた腰を伸ばした。

暦では夏も終わりに差しかかっているが陽射はまだまだ刺すように痛い。空が抜けるように高くなり始めると大きな台風の来訪もこれからが本番になる。

天気予報が次の台風を予想する。

「大潮と重ならんけりやええが」

沖縄あたりに強い雨を降らせ始めている台風に向ってヨシ婆が祈った。

「そつか、台風がまた来てるんやね……」

小さな台風は既に幾つか通り過ぎていたが、次は何十年かぶりの大雨になると被害の拡大する恐れをテレビのキャスターが口にする。

「明後日あたりからここいらも暴風圏内やろ、また浸水せにやええ

が」

溜息をつくヨシ婆の家は去年一昨年と二年続けて床下まで水が来た。畑も塩水が入り込んですっかりためにされてしまった。だからヨシ婆は急いでいた。大型台風の予報を聞いて、また畑がダメにされてしまう前に生っているものは収穫してしまおうと、間引きなどしながら手頃に育った茄子と玉葱をかごに山のように積んでいた。その中からまた一つ玉葱を取り「クズやけど味噌汁にでもすればええ」ぼんと手渡し

「佐和ちゃんのお母さんがな、家の事ばかりやらせてしもって普通に子供らしいことさせてやれなんだ、て言うつつたで。年頃の娘らしゅうボーイフレンドの一人もでけたらお母さんもちつとは安心するに」

「普通はそういうの心配するもんやろ……」

照れながら、複雑だった。

あの夜の光景が忘れられない。ふとしたはずみに脳裏に蘇る。



あの夜から、最初の三日ほど佐和子は随分悩んだ。確かにその目で見たあの光景を現実のものと認識できなかった。

苦しかった。盆に降りてきた見えず知らずの仏様が戯れに見せた雨の夜の夢だとも思った。しかし時間が経つほどにその光景はさらに鮮明に、鮮やかに蘇る。“夢”で片付けるには確かすぎる記憶。

やがて受け入れてしまった現実。

「そうだね、あの子が人間だったら……」

恋心は芽生えていた。

あの夜が全てを白紙に返した。

そしてようやく辿りついた。

彼が、りりちゃんだったのかもしれない……

けれど会いに行く勇氣は無かった。

全てが怖かった。確かめることも。言葉交わすことも。顔を見ることも。

「雨が来るかな」

一方で少年はいつもの堤防に腰掛けただひたすらに待っていた。

やはりあの夜彼女は見たのだ。来なくなってしまった待ち人を想いながら細い肩が不安で震える。

僕は、どんな風に見えたんだろう

雲の間から覗いた月はテトラポットの上に居た自分を十分に照らして見せただろう。けれど少年の方からは山の上からせりだした木の影が邪魔をしてカーブの向こうから覗いていた彼女の姿は、ぼんやりと確認できたもののその表情までは見る事ができなかった。

ずっと、ずっと待っていたのに……ようやく時が満ちて会うことができたというのに

自分のあの異形の姿を恐れてもう二度と会いには来てくれないかもしれない。

では、自分から彼女の住む村の近くまで訪ねてみようか？ 思い切って彼女の家まで訪ねてみようか。白とピンクの小さな花が幾つもの毬を作るように咲いている二本の木が目印の、そうだ、あれは確かサルスベリという名前の木だと言っていた。行くのは容易い。けれど……

怖かったのは彼女を訪ねた自分を見て彼女がどんな反応をするかということ。化け物と石を投げられるかもしれない。家の中に閉じこもって窓という全ての窓を閉じてしまい、顔も見せないかもしれない。

これまで過去に、親しくなつて、つい気持ちが緩んで本当の姿を晒してしまった人々の見せた反応が蘇り記憶の中を駆け巡る。

怖い。会うのが。けれど、会いたい。

来て欲しい、この場所へいつものように。来て欲しくない、彼女の恐れる表情を確かめてしまいたくない。

会いに行きたい。けれど……

こんな風に思ってしまうなんて

ぐるぐると佐和子のことばかり考えてしまう。

こんな風に、あの姿を知られてどう思われるか、怖いと思ってしまうなんて

今まで出会って恐れて自分から離れて行ってしまった人々に対して、ショックはあった。傷つきもした。けれど、その後彼らが自分をどう思っただろうか、そんな事を恐れたことは一度も無かった。

「どうすればいいんだろう、僕はこのまま、これから、どうすれば」

堤防の上で、立てた膝の中に頭を埋めるように抱え込んで、涙が

出そうな熱さを胸に感じる。  
遠くの沖で波が揺れる。

ちゃぽん

波音の向こうから蘇る古い古い記憶。小さな卵だった自分を暖かく穏やかに包み込んでくれていた産みの親がいつも語りかけてくれていた柔らかな声。

「そうだね、少なくとも僕は……ここで立ち止まっているわけにはいかないんだ。急がなきゃ。僕も残された時間は既に僅かなのだから。佐和子が……僕を恐れて否定してしまっても……立ち止まっているわけには……」

雨はまだ遠く。静かな静かな台風の前夕暮れ。シーズンが終わり人気の消えた砂利浜に降り立ち湾の林の影めざし駆けて行き人の目の届かない場所に來たのを確認して冷たくなりはじめた海にゆっくりと足を入れて行った。

「佐和子……」

波打ち際に集まった半透明の海月達が彼の足に道を譲るように、するりと左右に別れ静かに歩む彼を深い沖に誘うように先を開ける。

「どうか……」

どうか、恐れなくて。本当の僕を恐れなくて。

どうか、僕に恐れさせなくて。本当の僕の姿に怯えるだろうだろう佐和子の顔を見ても、傷つかない勇気を僕に……

台風が来ていた。風が波を大きく揺らし暗い空の彼方からこれから激しく降るだろう雨を予感させる。

佐和子の母親も仕事を早々に終えて帰ってきていた。

「今夜半から降り出すかねえ。風もそうとう強うなってきたし、明日の朝には過ぎるやろうけんどもまた庭の掃除が大変やねえ」

「大変や言つてもどうせ掃除するんは私なんやけん、お母さんが困ることないやろ」

まあそうやけど……と苦笑いしながら今日早く帰ってしまったせいで中途半端に残ってしまった仕事を気にする母親を氣遣う。

「明日朝早う出勤せないけんやろ、今日はもう休んだがええんと違う？」

慣れた手つきでちゃつちゃつと食卓を片付け洗い物に向う娘の後姿を頼もしく、けれど申し訳なく思う複雑な気持ちで「そうやねえ」と立ち上がる。

「あんたも早う寝なさいよ。こんな日は遅くまで起きとつてもええことないけん」

確かに、風にアンテナが煽られテレビの映りも悪い。こんな日に限って図書館から借りていた本が家の中で行方をくらます。加えてこの数日どこが悪いというわけではないのだが妙に体が重いような熱っぽいようなダルさが抜けない。「うん、私もさつさと寝るわ」と濡れた手を拭きエプロンをほどいた。

ちゃぼん……

台風が勢いを増してきた夜半。激しく雨戸を叩く雨音に紛れて小さく鳴くように何かが響いた。

ちゃぼん……

布団の中でまどろんでいた佐和子だったが耳に覚えのある音に目が覚めた。

「まさか……」

締め切った雨戸の向こうからそれは一定の間隔を置いて三度、四度と繰り返して聞こえてくる。佐和子は静かに音を立てないように窓と雨戸を開け、細い隙間から庭を覗き見る。

風で蹴散らされすっかり淋しくなってしまった百日紅の細い枝を指先で弄ぶ、白い背中が月も灯りも無い真っ暗なはずの夜の中でぼんやりと淡く光って見えた。

佐和子が窓を開けたのに気付いたのか、視線を感じたのか彼はゆっくりと振り向きちよつと困ったように眉間に皺を寄せながら微笑んだ。

「やあ、佐和子」

考える余裕も無かった。何故彼が今そこに居るのか、何をしに来たのか、この雨の中……佐和子は窓を超え裸足のまま雨の庭に駆け出した。

「大丈夫なの？　こんな台風の日に外になんか出て！　こんなに濡れて風邪でもひいたら……」

シャツの袖を掴み彼を雨の当たらない軒下に引つ張って行こうとする佐和子の口元に人差し指を当てて「しっ」と目を細めながら制した。ちらつと佐和子の部屋の隣の窓を盗み見「そんなに騒いでたら家の人起きちゃうよ？」微笑みながら小さく囁く彼の声がとても嬉しそうに聞こえたのは佐和子の気のせいだろうか。濡れてぺしやんこになった髪からしたたる一滴が月色にまばやきながら白いシヤツの肩先を滑り落ちて行く。

「だって、こんなに濡れて……」

「濡れても、僕は大丈夫だから」

濁りの無い笑顔の向こうに佐和子はあの夜の光景を思い出す。しつとりと濡れた何百本という細い触手達がざわざわと蠢きながらやがて一つの塊を作って行くのを見た、あの夜。

思わず掴んでいた袖を手放し後ず去ってしまった。彼もその腕を背中に隠すように回し首を傾け「うん、やっぱり見られちゃってたんだね」淋し気な声で呟いた。

沈黙の間を縫うように雨が激しく音を立て佐和子は何かを考えようとするとジャマをする。言葉が出ない。足元を流れてゆく雨の筋と目の前に立ちすくむ少年の肩先とを視線がふらふらと頼りなく泳いでいる。その様子に耐えかねて、彼が遠慮がちに言葉を聞いた。

「佐和子は、僕が怖い？」

怖いかと聞かれれば怖くないとは言い切れない。しかしそれを口にしてしまった後の彼の表情を見るのもまた怖い。返事に戸惑って

いる佐和子の気持ちを汲むようにゆつくりと彼が話し続ける。

「僕はずっと佐和子を見てたよ。あの小さな佐和子が海に沈んで僕の腕の中に落ちてきたあの日から」

激しい雨に叩かれ続けて頬に張り付いていた佐和子の髪先が大きく震えてしぶきを散らした。

あの夜あの海辺で見た不思議なふんわりと大きな生き物。彼の姿へと月灯りの下変化していったあの生き物。どこかで見た覚えがあった。けれどずっとソレと一致させて考えることができなかった。似ている、と一瞬思いもしたが、あまりにも非現実すぎる。ありえない。確かにずっと探し求め続けてはいたが本当に存在すると思っことをいつか諦めてしまっていた。だから、一瞬胸をよぎった思いはその場限りで忘却されてしまっていた。

その、一瞬脳裏をよぎった『ありえない』考えが再び蘇った。

「りりちゃん……？」

「うん」

呼びかけられて嬉しそうに、今まで見たどんな笑顔よりずっと、本当に嬉しそうに彼が笑った。

「正確には、りりちゃんではないのだけどね」

海から溢れてきた海水が二人の足元に水溜りを作り始める。佐和子はつ、と遠い空に目をやり、次に海へ視線を投げた。海と道路の境界は水に侵されぶわりと膨らんだ海面から波が押し寄せ出来た溜り。

「海が……大潮と台風が重なってる？ でもまさか急にこんな……」

慌てる佐和子の肩に手を置き

「大丈夫、これは台風のせいじゃないから」

「え？」

急激な海水の上昇。彼の不可思議な言動。理解できずに戸惑う佐和子を彼は柔らかく抱きしめて言った。

「佐和子、僕の、最後の希望。この日を僕はずっと待ってた……」

大きな波が堤防を越えて二人を頭上から飲み込んだ。

波は二人をゆっくりとさらい遠い海へ誘う。素足の裏を小さな泡がぼつぽつとくすぐりながら落ちて行く、ほのかに明るい海の底。

「明るい？」

「うん、大丈夫だから。怖くはないから、今は少しだけ僕に付き合っ  
つて……」

「息が……」

「僕が居れば大丈夫、怖がらないで、そして見て欲しい……」

「見る？」

「うん、僕の世界を」

静かだった。海面を荒削る風も無ければ叩きつけるうるさい雨も無い。ただひたすらに穏やかで静かな暖かい世界。

「初めて会ったのも、海だったね」

初めて会ったのも、海。確かに。けれどあの日の水底はこんなに暖かくは無かった……ぼんやりと佐和子があ幼かった日の事を思い出そうとする。

冷たく冷たく沈んで行ったあの日。けれどふとした瞬間に暖かく包まれた感触。その後すぐに水を吐いて苦しかった。吐き出したものは水だけではなく胸の奥の酸っぱい液体が口だけでなく鼻からも抜けて喉から鼻に通る細い道を痛く熱く刺すように刺激した。苦しさの中見上げた先に、りりちゃんと呼んだあの生き物が居た……あの日の緩やかな暖かさと同じ温もりを今感じる。

「アナタは……何？」

「全部教えてあげる。全部見せてあげるから、僕の全部を」

二人を中心に気泡の塊が取り囲みはじめ小さな竜巻のようにぐるぐると廻り始める。



「僕は……僕達は……遠い遠い昔、同じ海と大地の狭間に生きていた、同じ祖先の末裔……」

気泡の壁が開き、本かテレビの作り物でしか見たことの無い暑い古代の空気が広がった。

石造りの神殿と石畳の道。原色の衣をふわりとまとい素足で歩く人々。生まれたままの姿を欠片も恥じる様子も無く海に泳ぐ人々。彼らはとても自由に海と陸とを行き来した。

長い道のりを歩き続けても疲れを感じていないかのような強靱な肉体と同時に、長い時間を海の中で過ごしても陸と変わらず眠ることすら出来る空気を保つことのできた胸中。

やがて訪れる地震と津波。大地の異変は人々を陸と海に分けた。

陸へ逃げた大多数は津波を恐れ海から遠ざかるようにそれぞれ散り散りに散って別れ、長い時を経てそれぞれが違う土地で安住の地を手にいれる。その頃には彼らは既に海へ戻る術を失っていた。肉体が陸で生きるように変化していた。

海へ逃げた少数は大地の避けるのを恐れ海底深くに潜り静かに静かに繁殖を繰り返し細々とながらも血を絶やさないう子孫を残して行った。そして彼らもまた陸に別れた人々と同じように体が海で生きるように変化し、陸へ戻る能力を失った。

「海へ逃げた人々の子孫が僕、そして佐和子達は陸へ逃げた人々の子孫」

陸へ逃げた人々はその数も多かったので順調に子孫を増しそれぞれに繁栄していったが、海に逃げた彼らはその数が少なすぎた。

「何が悪かったのかは解らない。濃くなり過ぎた血だけが原因とは言いい切れない……けれどもいつからか僕たちの種族の女性は子供を宿す能力を失っていたんだ」

「どうして？」

「原因は解らない。僕たちの種族は自然淘汰の道を歩むのかと思われた……これは僕の父さんから、そして父さんはさらにその父さん

から……伝わって来た話なのだけど」

最初は女達の五人に一人が妊娠できなくなり、そして三人に一人、二人に一人とゆっくりと長い時間をかけ、やがて全ての女性はその体内で卵を作る機能を失ってしまった。まるで世界から存在する事を拒まれたかのように彼らは子孫を残す手段を失った。寿命と共に個体数は目に見えて減り、女性は自分達の中で命を宿す事のできなくなった自分の肉体を恥じるかのように一人また一人と群れから姿を消して行った。

「彼女達がその後どうなったのかは解らない。けれどこの広い海を長いこと漂ってきた中で同族の女性に一度も会ったことがないから……」

淋しそうな顔になり、けれど話は続く。

「だけど僕達は種の繁殖を止めるわけにはいかない。地上の人間たちとは袂を分けてしまったけれど、僕達も同じ先祖の元続いてきた命なのだから簡単に諦めてしまいうけにはいかないんだ」

そう、元は同じ生き物だった。彼らは海で生きるのに生きやすい形に姿も代え地上の人々はそこで生きるに適応した姿に変わって行った、が、元は同じ姿形の人間同士だった。何代前の男性だったのだろう、何故彼が突然にその発想に辿りついたのかは彼が既に亡き為に未だ永遠の謎だが。

元は同じ種類の人間であつたのだから、地上の女性の卵を分けてもらえば我々もまた繁殖が可能になるかもしれない

そして地上の女性を求めて彼らは陸に近づいた。

「でも、卵って言っても……」

「心配しないで」

「だって……」

彼の言っている事の意味が解らない。彼は彼女のこわばる体を再び抱きしめる。優しい温もりを混めながら力強く。

「佐和子、体が温かいね」

「え？ う、うん。ここ二日ほど体がダルくて、風邪気味かもしれない……」

「うっん、違う、僕にはわかるんだ。佐和子の中で初めての、一番最初の卵が今産まれてる……」

この日 waited 待っていた。

あの海の底で出会った彼女が一番最初の卵を宿す日をずっとずっと待っていた。

あの冷たい海の中を絶望に打ちひしがれながら、だけど子孫を残す事を諦めることができずに卵をくれる女性を求めてずっとずっと彷徨っていた。

けれどそれは口で言うほど簡単なものではなかった。

その姿を見た人の畏怖と偏見。まず話をするにさえ至らない。

陸の人間と同じ姿に変化する能力を得てようやく多少の会話は成立するようになったが、いきなり初対面の人間に「卵をください」と言っても通用はしない。自分の種族の話をしてみせても信用はされない。何度頭のいかれた馬の骨と思われ心も体も傷ついただろう。

もう自分は卵を得ることなく未来にこの命を紡ぐこともなく、このまま朽ち果ててゆくのかもしれない……諦め漂う水底に、突然ゆらりと落ちてきた少女が、居た。

「こんなに小さい娘では卵など持ち合わせていないだろうな」

けれどその腕の中で息を失い始めた命を棄ててしまえるほど、彼はまだ絶望に堕ちてはいなかった。

深い海の底を長時間漂うのに必要な空気を存分に含んだ触手の内側。体を丸め抱え込んだ少女の周囲に触手をすり合わせるようにして大きな空気の球を作る。自分の肺の中に残る酸素を触手伝いで口の中に入れてゆく。

激しく海水を吐き苦しそうに少女が薄く目を開ける。

「いけない、この姿を見られてはまた怯えられ……」

彼がそう懸念して思わず彼女を投げ出そうとした瞬間、小さな手が大きな彼を抱え込むように広がった。

「りり……ちゃん……？」

「佐和子は僕の姿を見ても怯えることなく、それどころか声をかけてくれた。すぐに気絶してしまったけれど穏やかに僕の腕の中で眠る佐和子を見て、僕は決めたんだ……」

この少女が卵を宿す大人になるまで待とう。そしてその時少女から拒否されてしまったなら僕はもう二度と卵を求めない。僕の命は子孫を残さないまま朽ち果てよう

「待つてよ！ だけど卵って……それって……」

「僕には解るんだ、この体の温かさはキミが卵を体の中で宿している温もり。ゆつくりとキミの卵が体の奥から降りてくる……」

「でもそれって、私に子供をつてこと？」

少年がまた笑う。大丈夫だよ、と佐和子の髪を撫でながら。

「この間海のいろんな話をしたよね？ 覚えてる？」

「うん……鯨が集団で……とか……タツノオトシゴとか……」

「そう、僕達の種族はタツノオトシゴと同じなんだ」

タツノオトシゴはメスの卵をオスが受け取りその体の中で孵化させて、やがて子供達はオスの体から産まれてくる。

「僕達も女性の卵を受け取り自分の体の中で育てて産み落とすんだ。だから佐和子、キミは何も傷つかない。苦しまない。約束するよ」

僕達の種族は一度に産卵できる子供はたったの一人。そして生涯のうちに産卵できるのは二度、三度だけ。けれど僕は随分長い間海を彷徨っていたのと、佐和子が卵を宿すまで待っていたのできつとこれが最後のチャンスになる。最初で最後の僕の子供を、キミの卵で……佐和子……

痛みは無い。抱きしめられた腕の中で温かなゼリーの中に漂うような、不思議な体験。

ああ、お母さんのお腹の中に居る赤ちゃんってこんな気持ちなのかもしれない……佐和子は自然に目を閉じる。

抱きしめられる。抱きしめる。

彼の知らない素肌の肉体。柔らかで暖かい不思議な肉体。

彼女の知らない彼の肉体。ゆるゆると蠢く触手達が包み込む温かな肉体。

キミが、僕を、呼んでくれた。

「りりちゃん」と、呼んでくれた。

その日から僕は、僕に、なった。

それまで僕には固有の名前は無く、ただ卵を求めて海を彷徨う種族の中の一人だった。

だけどあの日僕は、キミの中で唯一の「りりちゃん」になった。

あの喜びが、キミに解るだろうか？佐和子……

僕達は遠い過去に海へ逃げてから、名前という固体の識別もない、

ひとくくりの種族としてただ繁殖だけを繰り返してきた。子孫を増やせばやがて繁栄するだろうと信じて。

けれどキミが僕に向って「りりちゃん」と呼んでくれた時から、僕はやっと、僕の生きている理由が解った。

愛しいと思う誰かを抱きしめ、愛しいと思う誰かの、子供なんだ、欲しいのは。

僕はキミの卵を貰い僕の喜びをそのまま子供に教え伝える。

ただ子孫を増やすことのみに囚われないで、何の為に子孫を残すのか、語っていくから。

佐和子、僕に、名前をありがとう……

佐和子、僕に、ココロをありがとう……

佐和子、キミの卵だからこそ、僕は慈しみ愛するから……

佐和子、僕を、ただ子孫を増やすことのみに囚われ続けた海の末裔から解放してくれた、僕の唯一の女性……

台風の通り過ぎた縁側は陽の光を浴び乾いてゆく。

「佐和子、佐和子？」

「……ん」

「あんた何ていう所で寝とるん、もしかして一晩中ここにおったん？」

「え……そんな訳ないじゃない、ちゃんと布団で寝たわよお」

「やったらええけど……早く起きすぎて掃除でもしよったん？」

「う……ん」

朦朧とする佐和子を心配し「朝食は私が作るから早よお顔洗っておいで」と母親がせかす。

「うん……」体が鈍く重たい。

「何かなあ……お腹も痛い……」

体を動かすと縁側に小さな赤いしるしがついた。

「あれ？」

重い体を引き摺るように慌てながらトイレに駆け込んだ。

お母さん、私生理始まったみたい。

ええ？

どうしよう……

とりあえず私のナプキンを……

台風は秋の訪れと共に一段落し、山は蜜柑で甘く染まる。

「ヨシ婆ちゃんー」

二学期が始まり佐和子も白いYシャツと黒いスカートを翻しながら自転車を漕ぐ。

いつもの筏でいつもの通りヨシ婆が網を縫っている。

「婆ちゃん、今日なあスーパで饅頭安かったから買ってきたん、一緒に食べんね」

堤防に自転車を置き去りにして筏の橋に一步を軽く踏み出し駆けてゆく。

ヨシ婆が驚いた顔で佐和子を迎える。

「あんれまあ、佐和ちゃんようこつちに來れたなあ」  
「何？」

佐和子にはヨシ婆の驚く理由が解らない。

「佐和ちゃん海、イケンかったやないか……こんな棧橋もよう渡れんくらい」

「ええ？ そやった？」

佐和子の記憶の中から怖かった海は消えているのか。揺れる筏の上にちよこんと座りスーパの袋を開けヨシ婆に「はい」と饅頭を手渡す。それを受け取りながら老女はふっと呟いた。

「海神様んでも会ったかねえ」

小さな小さな呟きだった。が波音に消されることがなくそれは佐和子の耳に入った。

海神様かどうかは知らんけど

今はただ、ひたすらに、海が恋しい。

「何か、大事なもんはあるような気がするわ」

ふつと沖を見つめながら佐和子が応えた。

夏を過ぎて妙に大人びた表情を見せる佐和子に「まあそんなこともあるわなあ」とヨシ婆は網を縫う手を休めない。

いつか、また、会えるだろうか……

手と手を繋いで歩いたあの日に……



## 14（後書き）

終わりました。

読んでくださった皆様、ありがとうございました。  
引き続き次回作に取り掛かりたいと思いますので  
今後どうぞよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9984c/>

---

海に宿る月

2010年10月8日15時29分発行